

---

## ■デザイナーで綴る靴の近・現代史 ②■

### 20世紀前半 — 二人の巨匠が靴をファッションに引き上げる。

靴ジャーナリスト 大谷知子

---

この連載は、デザイナーを縦軸にファッションが確立された20世紀の靴の歴史を紐解こうとするものだ。連載第1回（本誌2020年9月発行193号掲載）では、アンドレ・ペルージアを歴史に現れた最初の靴デザイナーと位置づけたが、今回は、サルヴァトーレ・フェラガモとロジェ・ヴィヴィエにスポットを当て、20世紀前半のファッション状況を明らかにしたい。

ペルージアがパリ・モード界の第一線に躍り出た頃、フェラガモとヴィヴィエは、靴デザイナーとして本格的に活動し始めた。前回の記述と重なる部分もあるが、1920年代、及び'30年代のファッション状況を明らかにするところから始めたい。

#### ●ジャージーのスーツとナイロン靴下

現代の女性の装いは、20世紀初頭の動きから始まっている。その最初は、ポール・ポワレがコルセットをつけずに着用するドレスを発表したことだったが、より積極的な役割を果たしたのは、ココ・シャネルだったと思われる（次ページ年表参照）。

象徴的なのは、シャネル最初のヒット作である、1916年に発表したジャージー製のスーツだ。このジャージーはカシミアを使用していたそうだが、ジャージーは平たく言うとメリヤス。もっと分かり易くすると、Tシャツの生地、カットソーと言われ

るものだ。安価な素材の一つだが、当時も安価、かつ主に男性用下着に使われていた。加えて編み立てたニット生地であるため、伸縮性があり、当時の縫製技術では縫いにくいものだった。

しかしシャネルがジャージーに着目したのは、安価であることと伸縮性。伸び縮みするので、体にフィットし、動きやすいからだ。

発表した1916年は、第一次大戦中。男たちは戦場にかかり出され、工場を筆頭とした職場は女性に委ねられていた。つまり、女性の社会進出。職場に出た女性は、動きやすい服を求めている。

シャネルのデザインは、当時の常識を逸脱していたが、逸脱こそが、時代が求めた女性の生き方にマッチしており、だからこそヒットしたのだ。

もう一つ、この時代に起こったエポックメイキングな事象がある。1935年の米国・デュポン社によるナイロンの開発だ。説明するまでもなく、デュポンは世界的な化学メーカー。ナイロンは、合成樹脂の一種だが、当時、同社有機化学部門のリーダーを務めていた研究者、ウォーレス・カロザースは、合成樹脂を繊維状で取り出す方法を発見し、世界初の合成繊維ナイロンを開発するに至った。因みに「ナイロン=nylon」という名前は、「伝線(run)しないストッ

■ファッションと靴の歩み【1900～1960年代】■

- 19C 1900▶ パリ万国博覧会開催
- 1903▶ ジャポニズム・ファッション流行
- 1906▶ ポール・ポワレ、コルセットなしのドレスを発表
- 1909▶ ペルーシア、ニースにショッブ開店
- 1910▶ パリでピエトロ・ヤントルーニが人気を博す  
AGOシステムによる製靴法が開発される
- 1914▶ 第一次世界大戦勃発
- 1915▶ シャネルがパリにブティック開店
- 1916▶ ダダイズム運動、起こる  
シャネル、ジャージー製のスーツ発表  
米のケッズ創業
- 1919▶ バウハウス運動、起こる
- 1921▶ ペルーシア、パリに進出  
シャルル・ジョルダン、仏・ロマンで創業
- 1923▶ サルヴァトーレ・フェラガモ、ハリウッドで創業  
オープントウ、スリングバック、流行スカートが膝丈になる
- 1925▶ パリでアールデコ美術展開催
- 1926▶ ロジェ・ヴィヴィエ、パリ・ロワイヤル通りにアトリエをオープン
- 1927▶ サルヴァトーレ・フェラガモ、フィレンツェで開業
- 1928▶ パリでエルザ・スキヤパレリが人気
- 1929▶ ウォール街で株価大暴落、世界恐慌へ
- 1930▶ パリでカミーユ・デイ・モーロが活躍
- 20C 1935▶ 米・デュボン社がナイロンを開発  
第二次エチオピア戦争勃発
- 1936▶ サルヴァトーレ・フェラガモ、現在の本社・本店となるパラッツォ・スピーニ・フェローニにショッブ&工房を開く  
サルヴァトーレ・フェラガモ、ウエッジヒール&セロハン・アッパーを考案
- 1937▶ ロジェ・ヴィヴィエ、米の著名靴小売店デルマンと独占契約
- 1939▶ 第二次世界大戦勃発
- 1940▶ ナイロンストッキング発売
- 1947▶ クリスチャン・ディオール、ニューロックを発表
- 1950▶ 映画「赤い靴」のヒットで赤い靴が流行（日本）
- 1953▶ ロジェ・ヴィヴィエ、エリザベス女王戴冠式の靴をデザイン
- 1954▶ オードリー・ヘプバーンの「麗しのサブリナ」公開でサブリナシューズが流行
- 1955▶ クリスチャン・ディオール、ロジェ・ヴィヴィエとダブルネームの靴ブランド発売
- 1960▶ サルヴァトーレ・フェラガモ、62歳で死去
- 1962▶ イヴ・サンローラン、ディオールを離れ、自身のレーベルを発表
- 1963▶ ロジェ・ヴィヴィエ、パリにブティックをオープン、自らのブランドを発売
- 1965▶ ロジェ・ヴィヴィエ、イヴ・サンローランのモンドリアンルックに合わせバックル付きパンプスをデザイン

キング用の繊維」を意図する「norun」に由来しているという説もあるそうだ。

シャネルのジャージースーツは、カーディガンジャケットとプリーツスカートの組み合わせだった。スカートは、ふくらはぎの中間くらいのミモレ丈よりもやや長かったが、1920年に近付くにつれ、スカートは徐々に短くなり、20年代に入ると膝丈になった。

結果、ストッキングが必需品となったが、その頃のストッキングはシルク製で伝線しやすかった。丈夫なナイロンは、まさに女性たちが望んでいた素材だった。そして1940年、ナイロン製ストッキングが発売される。

こうして脚が露出していることがファッションとして一般化した。そして脚の先には、足、そして靴がある。ファッションにおける靴の重要性は、自ずと高まっていったのである。

1920年代に自身のショッブやアトリエを開いたフェラガモ、ヴィヴィエは、こうした動きを自分のことと捉え、靴に向き合っていた。

【サルヴァトーレ・フェラガモ】

●9歳で一足を仕上げた天性の靴職人

サルヴァトーレ・フェラガモは、改めて言うまでもなく、イタリアを代表するファッションブランドであり、ファッション企業である「サルヴァトーレ・フェラガモ」の創業者だ。

生い立ちを紐解くと、1898年、ナポリ近郊のボニートという小さな村に生まれた。家は貧しく、学校に通えないくらいだったが、天賦の才能があった。それが、靴づくりだった。

その才能は、妹が洗礼式で履く靴で証明された。洗礼式には白い靴を履く決まり

だったが、母が妹の洗礼式を翌日に控え、白い靴を買ってあげられないと泣いているのを見て、一晩で作ってしまったのだ。作り方は、誰にも習っていなかったが、向かいの靴修理店の様子を毎日、見ているうちに覚えてしまったのだった。

この時、わずか9歳。これをきっかけに靴づくりの修業を積み、12歳を目前に自分の店を持つ。しかし彼の夢はさらに膨らみ、アメリカの靴工場で働いていた兄の勧めによってアメリカに渡る。

兄が働く靴工場は、ボストンにあった。

20世紀初頭、靴産業をリードしていたのは、米国。そしてその中心はボストンが州都のマサチューセッツ州であり、ボストン近郊のリンには、機械生産の設備を備えた靴工場が200以上もあり、1日100万足以上を生産していたという。

フェラガモは、兄の案内で最新の製靴機械を備えた大工場を見学するが、リンの靴工場だったかもしれない。

しかしガタガタと音を立てて動く製靴機械に落胆する。これは、靴づくりではない！即座に就職しないと決断。もう一人の兄が住むカリフォルニア州のサンタバーバラに向かう。

サンタバーバラは、映画の街ハリウッドに近い。映画会社は衣装用の靴を必要とする。その仕事を得られればサルヴァトーレの靴づくりの腕が活かせるという、もう一人の兄の思い付きで、ツテを辿り映画会社の門を叩く。それが、成功へのドアを開く。

サルヴァトーレは、数々の映画のための靴を製作。その靴づくりで有名俳優の信用を得る。それを梃子に1923年、ハリウッドに自身の店「ハリウッド・ブーツ・ショップ」を開く。店は、当時のスター、メアリー・ピックフォードを筆頭とする顧客で大いに賑わった。

だが、サルヴァトーレの最終的な目標は、イタリアに戻り、成功を収めることだった。

イタリアに戻ったのは1927年。しかし彼の計画通りには進まず、破産という事態にも直面するが、それを乗り越え1936年、現在も本店兼本社であり続けている、フィレンツェのスピーニ・フェローニ宮にショップと工房を開くに至る。

グレタ・ガルボ、イングリッド・バーグマン、マリリン・モンロー、マレーネ・ディートリヒ、オードリー・ヘプバーン、キャサリン・ヘプバーン等々、スピーニ・フェローニを訪れた顧客は枚挙に暇がない。

#### ●物資不足から新モデルを生み出す

なぜ、サルヴァトーレ・フェラガモは、このような成功を収めることができたのか。

それは、第一に足にフィットする靴をつくる理論とそれを実践する技術だ。

前記の一代記で分かる通り、フェラガモは、ほとんど学校教育を受けていない。しかし、極めて勉強熱心だった。ハリウッド時代、彼は大学の公開講座に通い、整形外科学や解剖学を学んでいる。足を痛めず、快適に歩ける靴をつくるためだ。

そうした探求の結果、立った時、体重は土踏まずに掛かることを発見し、これに基づいて体重を支えられる靴をつくる方法を打ち立て、自ら実践し弟子にも伝えた。

加えて彼は、豊かな発想力と時代を捉えるセンスを持っていた。

彼がスピーニ・フェローニをオープンする直前、1935年、エチオピア戦争が起こった。エチオピアの植民地化を意図したイタリアが侵攻。エチオピア全土を占領した。これに対して国際連盟は経済制裁を発動。ドイツから輸入していたシャンク用の上質

■サルヴァトーレ・フェラガモの作品（『シューフィロ』2000年春号より）



セロファン紙を素材に用いたサンダル



コルクを使用したウエッジサンダル



透明ナイロン糸製の「見えないサンダル」



造形的にコードテープを使ったパンプス

な鋼が入って来なくなった。

シャンクは、踏まず部分を支える重要な部品。これなくしては、美しいヒールの靴はつukれない。

フェラガモは、一計を巡らす。そして思いついたのが、踏まずの下の空間部分をヒールで埋めてしまうこと。ヒールに踏まず部を支える機能を持たせれば、シャンクがなくても足が支えられる。つまり、くさび型のウエッジ。ウエッジソールは、サルヴァトーレ・フェラガモが考案したとされている。

また、同じ時期につくったのが、セロファン紙をアッパーに使用したサンダルだ。物資不足は革にも及び、イブニングシューズ用の良質なキッドが手に入りやすくなった。そんな中、母親のためにチョコレートの包みをむいてやろうとしていた時、その

透明な包装紙に引きつけられた。そこから擦ったセロファン紙を糸のように使ってアッパーをつくりイブニング用のサンダルをつくるに至った。

その他にも、透明のナイロン糸を編み上げてアッパーに仕立てた「見えないサンダル」、中心が空洞なのにしっかりと足を支える「鳥かごヒール」など、フェラガモにしかない独創的なデザインは、例に事欠かない。

### 【ロジェ・ヴィヴィエ】

#### ●彫刻から靴デザインへ

ロジェ・ヴィヴィエは1907年、パリ8区でレストランを営む両親の元に生まれた。しかし両親は、彼が幼いうちに他界。祖母によって育てられた。

そんな彼が、いかにして靴デザイナーに

なったか。

筆者は1998年冬、仏・トゥールーズで余生を送っていたロジェ・ヴィヴィエ本人にインタビューした。

その時、本人が語ったところによれば、16歳で彫刻を学ぼうと美術学校に入学する。在学中、小遣いを得ようと、ハンカチに自分で刺しゅうを施し、ブティックに持ち込んだところ、買い取ってくれて、かつ売れた。元々、モードへの興味が芽生えていたが、この経験によってモードの世界で生きることを強く意識した。

18歳、美術学校卒業を間近に控えた時、たまたま知り合いから靴のデザイン画を頼まれた。それを靴メーカーに見せると評価され、そこで働くことになった。

靴づくり、靴デザインのイロハを習得すると、1926年、パリの中心部に自身のアトリエを立ち上げる。当時、注目のデザイナーだったエルザ・スキヤパレリも訪れ、注目を集めるようになる。

その後、バリー、またアメリカのアイ・ミラーやデルマンなどにデザインを提供するようになる。アイ・ミラー、デルマンは、共に当時の靴ファッションをリードしたニューヨークを本拠とする靴小売店。特にデルマンとの関わりは深く、1937年に独占契約を結び、ダブルネームのブランドを展開している。

イタリアのストラという靴産地にあるロッシ・モーダ靴博物館で、ヴィヴィエがデルマンのためにデザインしたパンプスを見たが、ヴィヴィエが彫刻を学んだことを連想させる、造形性に富んだデザインだった。

その後、第二次世界大戦が勃発し、パリに戦火が及ぶ可能性が高まると、アメリカに渡り、終戦までを過ごし、1947年に帰国。ロジェ・ヴィヴィエの名が、ファッション史に明確に刻まれるのは、帰国後のことだ。

## ●ディオールとサンローランのために

靴デザイナー、ロジェ・ヴィヴィエを世界に知らしめたのは、イギリスのエリザベス女王戴冠式だろう。エリザベス2世が王の冠を戴いた、その時、履いていたのは、ロジェ・ヴィヴィエがデザインしたサンダルだった。ヴィヴィエは“シューズ界のフェベルジェ（ロシアの著名な宝石商&金細工師）”と形容されることがあるほど、ビジュをふんだんにあしらったデザインでも知られ、そのこともあり白羽の矢が当たったのかもしれない。

戴冠式は1953年のことだが、それ以前にヴィヴィエに注目した人物がいる。ファッション界の寵児として注目を集めていたクリスチャン・ディオールだ。

ヴィヴィエ本人が語ったところによると、1950年、別荘地として知られる南仏のミュージャンにいたヴィヴィエをディオール本人が訪ね、次のように言ったという。

「君は3日とミュージャンにいてはいけない。すぐにパリに出てきたまえ。私のために靴をデザインしてくれ。君のデザインを街にあふれさせよう。一緒に靴のプレタポルテをつくろうではないか」。

50年代のファッション界は、注文服のオートクチュールが全盛。既製服のプレタポルテが一般化するのには、1960年代に入ってからだ。

ディオールは、1947年にニュールックを発表すると、その翌年、香水を発売し、49年にはライセンス契約による商品展開も実現する。先見性とビジネスの才を持っていたと言えるが、「靴のプレタポルテ」の提案も、それを物語っていると言えよう。

そして1955年、二人の協業ブランド「クリスチャン・ディオール・クリエ・パール・ロジェ・ヴィヴィエ」の靴がデビューする。ディオールがダブルネームを許した

■ロジェ・ヴィヴィエの作品（『シューフィル』1998年春号より）



ロッシ・モーダ靴博物館所蔵のデルマンとのダブルネームのパンプス



「クリスチャン・ディオール・クリエ・パール・ロジェ・ヴィヴィエ」のパンプス



造形的なヒールが美しいパンプス



ビジュアを巧みに使ったデザインも持ち味の一つ

のは、ロジェ・ヴィヴィエだけであり、ディオールが1957年に急逝した以降も1962年まで続いた。

次にヴィヴィエに注目したのは、イヴ・サンローランだ。20歳そこそこで、ディオール亡き後の「クリスチャン・ディオール」を率い、1962年に独立すると矢継ぎ早にヒットデザインを出す。その中に1965年のモンドリアン・ルックがある。オランダの抽象画家、モンドリアンの作品に触発されて生まれた大胆に水平線と垂直線を配したミニドレスだが、これにコーディネートしたのがヴィヴィエによる靴。フロントに大きなバックルを配したローヒールだ。

今、この靴に再び会うことができる。

2003年、靴ブランド「ドッズ」などを展開する、ディエゴ・デラ・ヴァーレ率いる

トッズグループが、「ロジェ・ヴィヴィエ」ブランドのライセンスを得て、再びデビューさせた。そしてモンドリアンに合わせた、このローヒールが「ロジェ・ヴィヴィエ」のアイコンとして売場を飾っているのだ。

サルヴァトーレ・フェラガモは、時代を捉えるセンスと卓越した靴づくりの技術で、これまでになかったデザインを生み出した。その点でシャネルに通じているかのよう。一方、ロジェ・ヴィヴィエは、ファッションデザイナーと同等の立場で靴を創造してみせた。

靴をファッションの中に組み込んだことにおいて、二人は大きな功績を残したと言える。